

静岡句会の記

静岡で曲水の句会をして見やうと云ふ話は、去年の秋頃から同人の懸案になって居た。併しそうそう気儘に飛出すことも出来ず、いつか／＼と話し合つて居るうちに一陽来復、此の新年の休みを利用して、上野の例会の方は万事よしを君にお願する事として、行季匆忙、苔雨と樹人の兩名が、帰省中の長頸子君を驚かす事となった。

大正七年一月六日、東京でも花山亭に初句会が開かれると云ふ日、長頸子君の案内で、浅間神社から風の中を賤機山へ上つて、可なりに疲れた身体を、会場と定められた同君の宅へ落付いたのが一時を少し廻つて居た。途中三人合作の祝電「富士を挟んで東西春の句会かな」と云ふのを花山亭宛に送つた。会場は長頸子君の令弟烏喙子君の肝煎りで万端遺漏なく、句題を「松納め」「水仙」と極めて鴨居に貼り出す頃には、処の郵便局へ勤めて居られる柴月老人を筆頭に、在静の俳友諸君がつきつきにやつて来られる。会場の八畳の間は何となく水巴先生のお室に似て居た。先生の祝電「シヨクンノシンネントケフノガエンヲシユクス」と花酔さんの祝句「ゾウニバラノメデタキホクラハキタマヘ」の披露があつて句作に入る。銀屏の前の支那水仙が炭の薫りと交つて、泌々と吟腸をそそるものがあつた。雪に彩られた富士は日を浴びながら始終句作の窓に落ちた。第二回「雪」を作る頃松のとれた府中の夜は静かに更けて、会場の空気は益々緊張しつつあつた。(樹人)

附記

長頸子

小さいなりに句会を開くとすると小庵には正に大事である。

それに幾人來会者があるか當がつかないが、取敢へず二十人ばかりの座布団を用意させて一切を弟に托して、前日來々岡中の樹人君と同道、苔雨君を停車場に迎へて家に戻ると、既に龍爪会の三四の方が見えて居た、座敷の八畳と、次の間が半分ばかり屏風で仕切つて座布団と火鉢が並んでゐる——これで人数さへ揃へば兎に角一つの俳席である。それからその來会者に續いて山灌氏が見え、静岡の鳴雪翁の名称を捧げる柴月氏が見えてからは來会者が一切れになった。柴月氏の話しでは三六会の諸君は皆残念ながら出席し兼ねるとの事であつたが、江尻及びその附近を中心とし他の曲水吟社員をも含む反省吟社諸君が一人も見えないのは淋しい、江尻へ長距離電話を掛けたが一向に要領を得ないで四時になつてしまつたので思ひ切る。來会者の多数といふ事は句作の上には考へものではあるが、小庵初めての句会であり、わざ／＼遠く來会された樹人の為にも聊か淋しかったのは済まなかつた。

然し静岡俳壇の中心たる龍爪会の諸君と、これから打つて出やうとする静岡中学校の若い人達が加つて、凡そ十四人落付いた気分で作したのは私として大きな喜びであつた。

最初の席題を終つて次の「雪」に移らうとすると、樹人苔雨両君と夕食持参の柴月氏を除く諸君は「写生にゆく」と言ひながら一斉に外へ出て行つた。暫くして又一斉に戻られるや、山灌氏の二十句を筆頭に皆どし／＼句箋を箱に投込まれたのは驚いた。そうして皆一様に赤い顔をしてゐたのはたゞに夜風の寒かつたばかりではないらしい。座の中央に忽ちに堆く積んだ句箋は忽ちに浄書されて、選句、披露、十時散会。

会を終れば、また匆忙と帰京される樹人君を送つて、苔雨君